

The Geoffrey Bawa Collection





Phantom
Hands

The Geoffrey Bawa Collection



GEOFFREY BAWA TRUST



Furniture by the Geoffrey Bawa Practice

Phantom Handsは、Geoffrey Bawa Trustとの協働により、スリランカを代表する建築家ジェフリー・バワの建築事務所が1960年代半ばから1990年代半ばにかけて手がけた家具、照明、オブジェのコレクションを再編集し、現代に向けて再構成・複製しました。

この約30年にわたり、バワの事務所では、彼が設計した建築のために数多くの家具が制作されました。その多くはクライアントからの正式な依頼によるものではなく、建築と調和する空間を追求するなかで、自発的に生み出されたものです。

バワとその同僚たちは、形態や機能、製造効率を重視する従来の家具デザインの形式主義から意識的に距離を取り、当時の国際的なデザイン動向に目を向けながらも、地域固有の素材や伝統的な技法、そして職人の手仕事に深く根ざした制作を行いました。彼らの仕事は、政治的不安定、長引く内戦、厳しい輸入規制、限られた予算といった過酷な状況のもとで進められましたが、そこにはそうした困難を感じさせない静かな強さと気品が備わっています。

これらの家具は、スリランカに根づく文化的折衷性と、モダニズムがもつ簡素な美学とを見事に融合させています。いずれの作品も、個人的な発想や感情を出発点としながら、それが明確な意図と美的判断を経て形にされたものです。

今回のコレクションは、バワの幅広い創作活動の中から選び抜かれたものであり、彼の設計に通底する多様性を映し出すと同時に、繰り返し現れる形態やモチーフのなかには、一貫した構想と美的統一を見ることができます。

Contents

Geoffrey Bawa	5
No. 11 Sofa	6
Bentota Lounge Chair, Cane Version	7
Bentota Lounge Chair, Upholstered Version	8
Bentota Dining Chair	9
Kandalama Lounge Chair	10
“Next Door Café” Chair	11
Saddle Chair	12
Leopold Seat	13
Kandalama Perch Bench	14
No. 11 Guest Suite Sofa	15
De Saram House Centre Table	16
Lunuganga Dining Table	17
No. 11 Sofa Side Table	18
Conical Metal and Stone Lamp	19
Unfolding Lamp	20
Kandalama Ashtray	21

Geoffrey Bawa

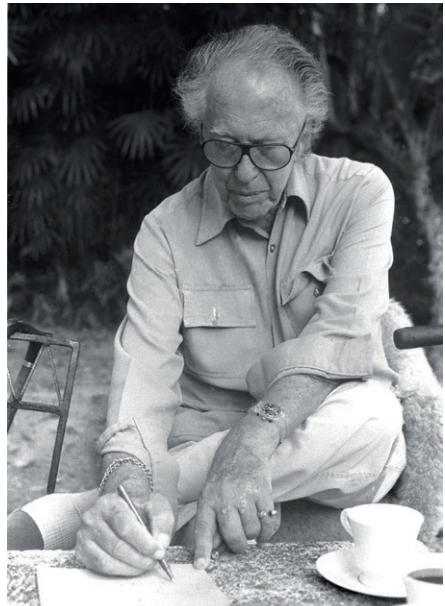
1919–2003

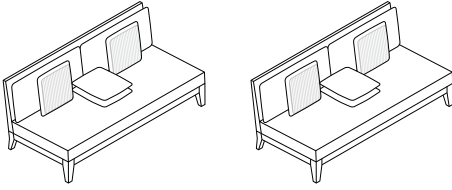
20世紀を代表する建築家の一人、ジェフリー・マニング・バワ(1919年7月23日-2003年5月27日)は、その卓越した創造性によって、他に類を見ない建築世界を築きました。

スリランカに生まれたバワは、1954年から1957年までロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーション・スクール・オブ・アーキテクチャーで学びました。彼自身の多様なルーツと広範な旅の経験は、歴史を多層的かつ多面的に捉える独自の視点を育むことにつながりました。

バワの豊かな建築実践は、外の世界を受け入れながら、その土地の文脈のなかで自然や風土を尊重する感性をかたちにしたものでした。スリランカの豊かな自然への深い敬意は、彼の作品全体に一貫して刻まれています。

建築家としてのキャリアにおいて、バワは生涯にわたり200を超えるオリジナルの設計を手がけ、一貫した美意識と構想力を発揮しました。彼は今なおスリランカを代表する建築家であり、独自の美的世界を築いた存在として高く評価されています。





No. 11 Sofa c.1968

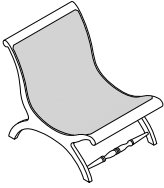
W 1800 x D 1018 x H 744 (Original) / W 1800 x D 857 x H 744 (Compact)

Teak, cotton fabric, polyurethane foam, plywood, pinewood, and metal components

このソファは、1960年代のスリランカで一般的だったマットレスに台座を加え、木枠のハードボード製の背もたれを組み合わせて開発されたものです。張地には、ジェフリー・パワの親しい友人であり、協働者でもあったバーバラ・サンソニが創設した手織物ブランド「ベアフット」のチェック柄ファブリックが使用されています。座面にはココナッツ繊維を用いた厚みのあるクッションを採用し、奥行きを抑えた設計となっています。

復刻版のソファは、パワのコロンボの自邸(33番レーン11番地)に置かれていたオリジナルモデルをもとに、通常サイズとコンパクトサイズの2種類で展開されています。ベアフットとの協働により、黒・白・グレーのチェック柄を基調とした代表的なファブリックに経年変化した張地の風合いを再現するための未晒し仕様が新たに開発されました。背もたれのクッションには耐久性を高めるためニット裏地が施され、模様やカラーは現代的な感覚を取り入れてアップデートされています。





Bentota Lounge Chair, Cane Version c.1967

W 600 x D 821 x H 720

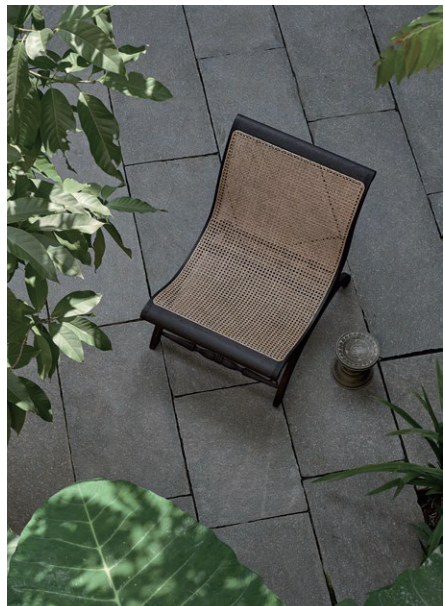
Teak frame with cane detailing

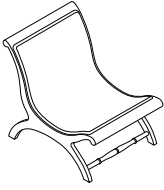
このチェアは、パワのコレクションにあった植民地時代のアームチェアから肘掛けを取り外すことで生まれたデザインで、最初に採用されたのはベントタ・ビーチ・ホテル（現在のシナモン・ベントタ・ビーチ）でした。その後、この椅子はスリランカを代表するデザインのひとつとなり、スリットを入れた屋外仕様など、さまざまなバリエーションが生まれました。

この植民地時代のチェアの系譜における代表的な解釈としては、キューバ出身の家具デザイナー、クララ・ポルセによる名作「ブタッケチェア」が挙げられます。座面にレザーを用いたポルセの椅子に対し、パワによる後年のデザインでは、より熱帯の気候に適した籐が採用されています。また、脚部の間には装飾的な加工を施したブレース（補強材）があしらわれている点も特徴です。

今回のリエディションは、ベントタ・ビーチ・ホテルで使用されていた仕様をもとに再現されたものです。

現代の製造工程に適応するため、木製フレームの厚みには調整が加えられていますが、側面のプロポーションはオリジナルの意匠を忠実に受け継いでいます。籐張り仕様と張り地仕様では横木の意匠が異なり、それぞれの特徴は今回のリエディションでも丁寧に再現されています。





Bentota Lounge Chair, Upholstered Version c.1967

W 600 x D 821 x H 720

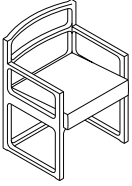
Teak frame with cotton fabric upholstery and foam

このチェアには、籐張り仕様だけでなく張り地仕様のバリエーションもあり、コロンプの自邸(33番レーン11番地)のゲストスイートなどで使用されました。こちらも同様に、バワが所有していた植民地時代のアームチェアからアームレストを取り除くことで生まれたものです。

このリエディションは、バワのコロンボの自邸にあるゲストスイートで使用されていた張り地仕様のバージョンをもとに製作されました。

現代の製造工程に適應するため、木製フレームの厚みには調整が加えられていますが、側面のプロポーションはオリジナルの意匠を忠実に引き継いでいます。なお、籐張り仕様と張り地仕様では横木の意匠が異なっており、それぞれの仕様に見られる特徴は今回のリエディションでも丁寧に再現されています。黒の張り地には、バワが当時使用していたサブライヤー「ベアフット(Barefoot)」のファブリックが採用されています。





Bentota Dining Chair c.1967

W 569 x D 552 x H 785

Red oak, foam, and cotton fabric in Barefoot's signature Jack & Ebony pattern for the cushion

シナモン・ベントタ・ビーチのメインダイニングチェアとしてデザインされました。黒の塗装仕上げに、ベアフット製コットンクッションが合わせられています。その後、パワはこの椅子をトリトン・ホテル(現・ヘリタンス・アファンガッラ)でも再び採用し、当初はチャイニーズ・レッドに真鍮のコーナー金具付きで使用され、のちにグリーンに変更されました。これらの多くは、2004年の津波で失われました。

座面の傾斜は快適性を高めるために3度調整され、手織り生地に合わせて全体の寸法も繊細に見直されています。クッションには、ベアフット社の「ジャック&エボニー」柄を採用し、No.11に残るオリジナルの風合いになじむよう、色調をやや落ち着かせています。木部には、水性仕上げによる環境配慮型の塗装を施しました。素材には、持続可能性・耐久性・色の適応性に優れた北米産レッドオークを使用。表面は軽くブラッシングを施し、現代的な触感を加えています。





Kandalama Lounge Chair c.1994

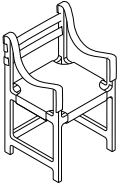
W 571 x D 704 x H 868 (Original)

Aluminium frame, available in anodised black finish

1990年代初頭、パワはオーストラリアの建築家ラッセル・ホールから贈られた波鉄板の椅子を、自身のルヌガンガ・ガーデンに設置。これに着想を得て、1994年にはカンダラマ・ホテル(現・ヘリタンス・カンダラマ)のために、曲げ加工を施したアイアンスラット仕様の椅子をデザインしました。1997年、ブリスベンで開催されたパワ作品の展覧会で講演を行ったホールは、この椅子に対する称賛の意を表し、パワによる自身のデザインの再解釈を高く評価しました。

リエディションでは、椅子全体の重量を軽減し、輸送の利便性を高めるためにアルミニウムのフラット材を使用しています。曲げ加工の精度と一貫性を確保するために専用のジグを設計し、正確なカーブを実現しています。スラットの固定には、特殊な溶接技術とビスを併用することで、形状の安定性を保っています。





“Next Door Café” Chair c.1965

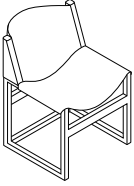
W 480 x D 455 x H 850

Red oak frame with Indian buffalo leather upholstery

このチェアは、19世紀にイギリス軍で使用されていたルーキー・チェアや、デンマークの建築家コーアクリントが1933年にデザインしたサファリチェアから着想を得ています。全体のフォルムはパワが手がけたベントタ・ダイニングチェアの系譜を継いでおり、最初は彼の事務所の隣にあったカフェのために製作されたことから、「ネクストドア・カフェ」チェアと名付けられました。その後、1967年にはベントタ・ピーチ・ホテルのオールデイダイニングのカフェでも使用されました。

復刻版では、当時のオリジナルデザインが背の高い人々向けに設計されていたことから、快適性を高めるためにプロポーションが調整されています。張地には、当初使用されていたスリランカ製の手作りレザーに代わり、デリーを拠点とするキャンペーン家具メーカー、J&R Guram社による高品質なインド産バッファローレザーが採用されています。木部には環境に配慮した水性仕上げが施され、素材には持続可能性・耐久性・色の適応性に優れた北米産レッドオークを使用。軽くブラッシングされた表面が、現代的で触感に富んだ仕上がりを生み出しています。





Saddle Chair c.1974

W 553 x D 505 x H 760

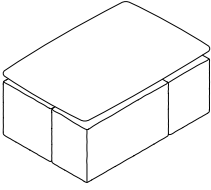
Red oak frame with Indian buffalo leather upholstery

このチェアは、1974年にスリランカ・ベルワラにあるネプチューン・ホテル(現ヘリタンス・アーユルヴェーダ)のバーのためにデザインされ、2012年の改装まで長年にわたり使用されてきました。また、インドのマドゥライ・クラブのバーでも採用されています。バワはこの椅子をしばしば「サドルチェア」と呼んでいました。

復刻版では、当初のプロポーショナルを忠実に再現しています。張地には、当時のスリランカ製ハンドメイドレザーに代わり、デリーを拠点とするキャンペーン家具メーカー、J & R Guram社による高品質なインド産バッファローレザーを採用しています。木部には環境に配慮した水性仕上げを施し、素材には持続可能性・耐久性・色の順応性に優れた北米産レッドオークを使用。軽くブラッシングされた木肌が、現代的で心地よい触感をもたらしています。

レザーはブラックとバーガンディの2色のカラーバリエーションをご用意しています。





Leopold Seat c.1967

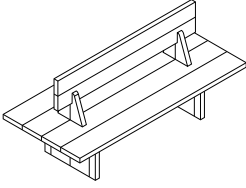
L 800 x D 548 x H 390

Stone aggregate and foam-filled batik fabric cushion

バワがルヌガンガへ向かう際、ロールスロイスやトヨタのダブルキャブの荷台には、常に愛犬のダルメシアンたちが同行していました。いずれも「レオポルド」という名前がつけられていたといいます。コロンボの自邸(33番レーン11番地)には、彼らのために玄関ホールに特別なコンクリート製のベンチが設けられており、その上にはエナ・デ・シルヴァがデザインしたバティックのクッションがいつも置かれていました。

復刻版は、軽量で可動性のあるストーンアグリゲート(骨材入り石材)製で仕上げられています。クッションには、エナ・デ・シルヴァが創設したアルウィハーレヘリテージ・センターより仕入れた白黒のバティック生地を使用。バワ邸のクッションカバーを手がけていたのと同じ職人たちによって製作されています。





Kandalama Perch Bench c.2005

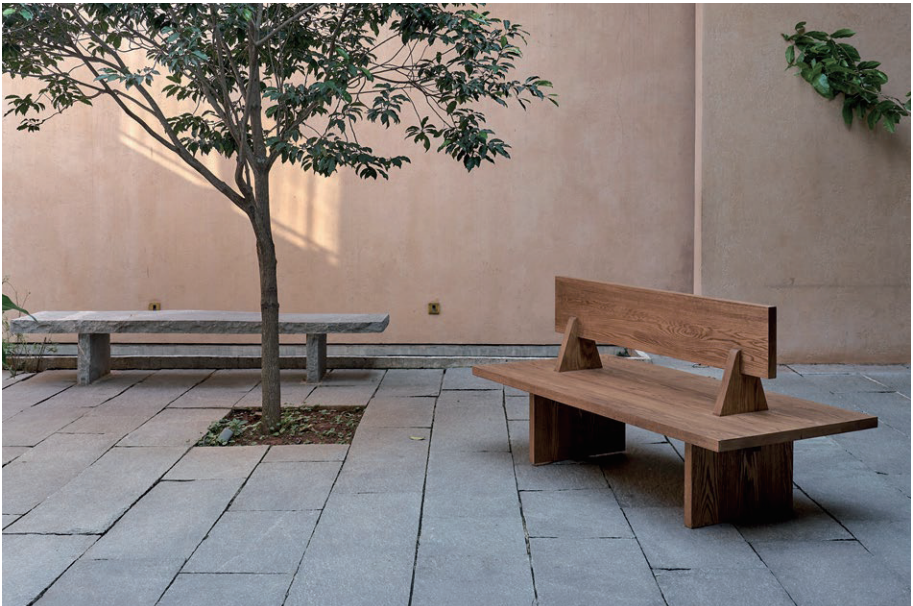
W 1850 x D 900 x H 950

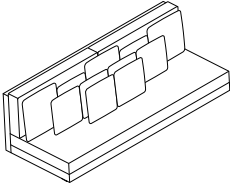
Available in teak or red oak

カンダラマ・パーチ・ベンチは、1991年にパワの設計事務所に加わり、後に事務所を率いることとなったチャナ・ダスワッテによってデザインされました。パワの逝去後である2005年にカンダラマ・ホテルへ設置され、広々としたベランダやロビーにおいて、彫刻のような存在感を放ちながらベンチとしても機能しました。頑丈な木製構造は、背もたれの上に腰掛けるなど、自由な使い方を受け入れるもので、人々が自然と集まるコミュニティ的な場所となっていました。

復刻版では、特にベンチの両端に座った際の快適性と安定性を考慮し、プロポーションが丁寧に調整されています。

また、製作工程にも配慮し、一般的に流通している板材サイズを活用することで、材料の無駄を最小限に抑えています。さらに、通常はかさばるこのベンチを、より簡単かつ経済的に輸送できるよう、フラットバック仕様で設計されています。





No. 11 Guest Suite Sofa c.1968

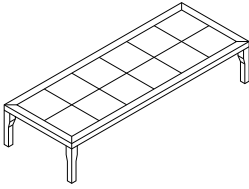
W 2125 x D 890 x H 815

Teak, pinewood frame, cotton upholstery fabric, foam, and plywood

この白いソファは、コロomboのパワ自邸(33番レーン11番地)の1階ゲストスイートのためにデザインされたもので、張地およびクッションにはBarefoot(ベアフット)のファブリックが使用されています。脚部のデザインや全体のフォルムは、同じ邸内の1階にある別のソファと異なっており、それぞれに異なる意匠が施されています。

復刻版は、33番レーン11番地のオリジナルソファの寸法とプロポーションを忠実に再現しています。張地とクッションにはBarefoot(ベアフット)社のファブリックを使用しており、そのなかには、No.11に残る経年変化した生地の風合いを再現するために共同で開発した無漂白のナチュラルカラーも含まれます。現代の張り加工基準に対応するため、Barefootの手織り生地にはニットの裏打ちを施し、適度な厚みと耐久性を持たせています。





De Saram House Centre Table c.1983

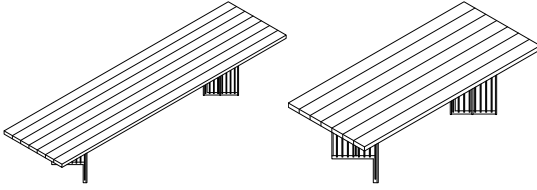
L 1968 x D 749 x H 380

Marble tiles and teak

このセラミック天板のテーブルの初出は、1982年に開業したトリトン・ホテル(現ヘリタンス・アフンガッラ)で、同時期には葉の模様をあしらったコンクリート天板のバージョンも設置されていました。より長尺のタイル天板バージョンは、デ・サラム邸にてコーヒーテーブルとして使用されており、同様のテーブルはバワの自邸(33番レーン)でも複数確認されています。

復刻版は、デ・サラム邸にあるセンターテーブルを忠実に再現したものです。天板には、バンガロール近郊の天然石加工会社「TAB Surfaces」工場で生じた余剰の端材をアップサイクルした大理石タイルを使用しています。このサステナブルな取り組みにより、オリジナルの寸法とクラフトマンシップを保ちながら、アップサイクル素材を活用した生産が実現されています。





Lunuganga Dining Table c.1970

L 4030 x D 1040 x H 715 (Original) / L 2400 x D 1040 x H 715 (Compact)

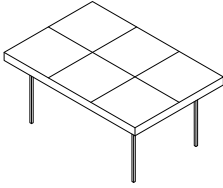
Teak tabletop with stainless steel legs

1960年代、パティックデザイナーのエナ・デ・シルヴァと彫刻家のラキ・セナナヤケは、パラ・マラの巨木のスラブを用いて、素朴な家具を製作していました。ルヌガंगाのガーデンルームに置かれたこのテーブルも、そうした取り組みから着想を得たものと考えられます。パワは倒木として「使用に適さない」と判断されていた木材の一枚板を天板として活用しました。3インチ厚の重厚な木材を支えるため、脚部には三角形の断面をもつ鍛鉄製の構造が採用され、安定性が確保されています。

復刻版は、オリジナルと同じサイズのタイプに加え、限られた空間にも対応できるコンパクトサイズの2種類で展開しています。

天板は、広幅の一枚板の調達が現実的でないことから、複数の木片を丁寧に接合して製作されています。また、木材の反りや歪みを防ぐため、天板裏にはアルミニウム製の補強材を取り付けています。脚部には、従来の不規則な間隔の金属ロッドに代わり、黒のパウダーコーティング仕上げを施したネジ固定式のステンレス製パーツを使用し、構造の安定性と精度を高めています。





No. 11 Sofa Side Table c.1965

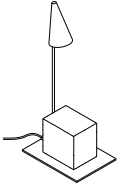
L 938 x D 633 x H 431

Marble tiles, teak, and black stainless steel base

このテーブルは、鍛鉄製の脚部に、木枠の中に大理石タイルをはめ込んだ天板を組み合わせた構成となっています。バワの設計事務所では、その後も多くの住宅やホテルプロジェクトにおいて、同様の構造を持つテーブルを多数手がけています。

復刻版は、33番レーン11番地にあるサイドテーブルの寸法を忠実に再現しています。オリジナルに使われていた鍛鉄および溶接接合は、ステンレススチールとファスナーによる構造に置き換えられ、より安定性と耐久性を高めています。天板に使用されている大理石タイルは、バンガロール近郊の天然石加工会社「TAB Surfaces」の工場から出る余剰の端材をアップサイクルしたもので、サステナブルな視点が製作工程に取り入れられています。





Conical Metal and Stone Lamp c.1993

W 353 x D 254 x H 816

Aluminium and concrete composite; Artefact not included with the lamp

このランプは、1993年にカンダラマ(現ヘリタンス・カンダラマ)のカンチャナ・ラウンジのためにデザインされましたが、当初は予算の都合により装飾部分が省略されていました。その後、2005年になって装飾が加えられ、完成形となりました。コロンボのパワ自邸(33番レーン11番地)にあるバージョンは、ベルワラ出身の金属職人ダンスタンとの協働でパワ自身が試作したサンプルで、当時パワがニューデリーで設計を手がけていた住宅のクライアントから贈られた金属製の馬の飾りが取り付けられています。

復刻版では、オリジナルで使用されていた無垢の石材に代わり、軽量の複合ストーンを採用しています。金属パーツはアルミニウムから精密加工されており、ランプ全体をフラットバック仕様にする事で、輸送効率の向上が図られています。





Unfolding Lamp c.1960

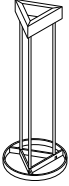
W 234 x D 234 x H 555

Laser-cut and bent aluminium

このランプの起源は明らかではありませんが、1960年代にバワがロンドンの百貨店ハロッズで入手した紙製ランタンを元にアレンジされたものと考えられています。コロomboの自邸(33番レーン11番地)ではゲストスイートに飾られており、ルヌガンガの前庭のテラスには青色のバージョンが置かれていました。

復刻版は、クリアアルマイト仕上げを施したアルミニウム製の精密なレプリカです。ランプの複雑なフォルムはレーザーカットされたアルミ板を曲げ加工することで形作られており、構造の一部として組み込まれたスライド式のロック機構により、各パーツがしっかりと固定されます。





Kandalama Ashtray c.1997

W 258 x D 258 x H 750

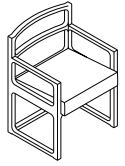
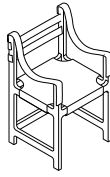
Aluminium frame and tray

この灰皿スタンドは、1993年にカンダラマ・ホテルのカフェ・カチャンのためにデザインされた小さなカフェテーブルが起源です。もともとは合板の天板が取り付けられていましたが、後に三角形の灰皿に置き換えられ、三本のロッドがベースまで伸びる構造によって支えられています。この仕組みにより、喫煙時の煙が周囲の利用者に届きにくくなるよう配慮されていました。スタンドには、同じくカフェのために特別に製作されたスラット(すのこ状)構造の椅子がよく組み合わせ使用されていました。

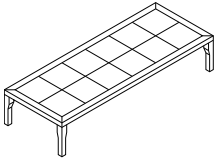
復刻版では、精密な機械加工部品とファスニング技術を用いた現代的な製造方法に適應させています。ベース部分にはアルミニウム製のロッドとフラットバーを使用し、トレイ部分はフライス加工によって成形されています。仕上げはブラックアルマイトとなります。



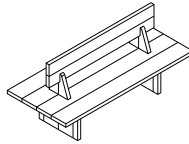
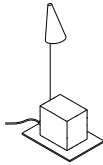
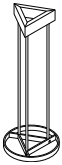
Bentota Beach Hotel



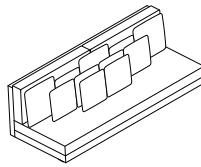
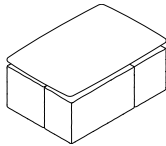
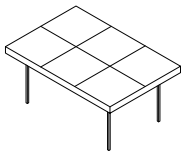
De Saram House



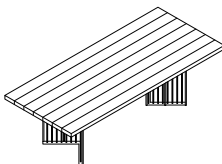
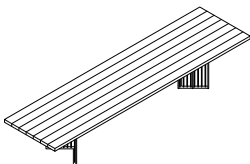
Heritance Kandalama



No.11



Lunuganga





Phantom
Hands



GEOFFREY BAWA TRUST